

カラコルム遠征隊のマネジメント

三澤日出夫

1. はじめに

私は1976年（昭和51年）、カラコルムヒマラヤの未踏峰アブサラサス（7245m）登山隊に隊長として参加した。幸運にも三人の隊員が初登頂を果たし、全員元気で帰国したので成功といえる。しかし、大学山岳会が組織した隊でありながら、会内への報告会を開いただけで、きちんとした報告書を作成することが出来なかったことを非常に残念に思い、胸を張って成果を誇ることが出来ないまま今にいたっている。

遠征登山の実施は、様々な分野の方々に援助と協力をいただいてこそ可能となるものである。実施後にはきちんとした報告書を作成してはじめて完了したといえる。ちなみに、1979年（昭和54年）にガネッシュヒマールのラブサン・カルポ（7150M）に初登頂した岡山大学山岳会は、小坂淳夫岡山大学長の序をいただいた報告書を出版している。私の所属している大阪大学山岳会が4回にわたる遠征の末1970年（昭和45年）に初登頂したネパールヒマラヤのP29峰（7835m）については、楢有恒氏に序をいただいた報告書を発行している（私は第三次隊に隊員として参加した）。

以来23年間、登山と無縁な人並みの会社勤務と家庭を大切に生活をしてきた。そして会社を定年退職して「株式会社アルマ経営研究所」で遠征の話をしたところ、非常に興味を持たれてもっと面白い話を詳しく聞きたいとの希望があったので昔の思い出をつづることになった。現在の情勢は当時とは変わっているし、カラコルムとネパールの二度の登山を混同した記憶間違いもあったり、正確さに欠ける所もあると思うがそこはご容赦をいただきたい。



2. カラコルム遠征登山の規模（期間と人数）

お話しするカラコルム遠征登山の規模は日本の山登りとは桁違いに大きい。その事を知って頂く為に先に概要を表に記します。車の終点から歩き始めてベースキャンプに着くまでに45日かかる。名古屋に上陸してずっと歩いて富士山に登るようなものである。荷物は全て人力で運ぶので93人のポーターを必要とした。隊員8名とリエゾンオフィサー1人、ポーター93人の計102名の大部隊編成になった。

アブサラサス峰（7245m）遠征の規模「期間と人数」

月日	摘要	位地（標高）	人数	
4 26	先発隊 空路ラワルピンディ着	パキスタンの首都	隊員2名	
5 3	本隊 空路ラワルピンディ着	パキスタンの首都	隊員5名	
	10	後発隊 空路ラワルピンディ着	パキスタンの首都	隊員1名

	12	ラウルピンディから空路 スカルドへ	最奥地の空港	全隊員 8 名 リエゾンオフィサー 1 名
	18	スカルドからジープでカパルへ	車道の終点	全隊員 8 名 リエゾンオフィサー 1 名
6	24 1	前期キャラバンスタート カパルから徒歩でナラムへ	氷河の末端	全隊員 8 名 リエゾンオフィサー 1 名 ポーター 93 名
	2 4	後期キャラバンスタート ナラムから徒歩でアリブランサへ	標高 4850m	全隊員 8 名 リエゾンオフィサー 1 名 ポーター 21 名
	5 11	アリブランサからビラフォンド峠への荷上げ	標高 4850m 5550m	全隊員 8 名 リエゾンオフィサー 1 名 ポーター 21 名
7	12 8	ビラフォンド峠からロロフォンド氷河テント、 シアチェン氷河テントを経てベースキャンプ への荷上げ	標高 5550m 5200m 4900m 5200m	全隊員 8 名 ポーター 7 名
	7 8 26 4 7 13	C I 設営 C II 設営 C III 設営 C IV 設営 隊員 3 名が登頂 ベースキャンプ帰着	標高 5700m 6200m 6700m 7000m 7245m 5200m	全隊員 8 名
8	14	ベースキャンプから、帰路前期キャラバン、ゴ マまで	最奥の部落	全隊員 8 名 ポーター 10 名
8	21 24	ゴマから、帰路後期キャラバン、カパルまで		全隊員 8 名 リエゾンオフィサー 1 名 ポーター 14 名

注：リエゾンオフィサーはパキスタン政府から派遣される連絡将校のこと。（詳細は本文参照）

3. いいだしっぺと隊の編成

本格的な登山を続けている人は、海外の山、特に「氷河を持った山」に登ってみたいと言う願望を持っている。海外登山の経験者の話に聞き惚れ、同好の仲間と報告書や文献を読み、夢を語っている内に支持者・共感者が現われて、目標の山名が具体的にになって計画が実現に向けて動き始めることがある。企業内で新しいプロジェクトが取り上げられる時のいいだしっぺが、気遣いのように熱心な発案者であるのと同じである。度々遠征隊を派遣する山岳会には、この様ないわば気遣いのような人々が次々に現われていいだしっぺとなり、それぞれ遠征隊を送ることが出来るようである。

遠征隊は通常単一の山岳会で編成される。第三次にわたって派遣されたマナスル（8125m）登山隊のように、日本全国の登山関係者が支援・参画して日本山岳会の登山隊となった例も有る。どちらの場合でも隊員が多かったり、所要の資金の一部を会が負担する場合には、隊員選考は理事会なり委員会により公正を期して行われる。例えいいだしっぺであっても選にもれる場合がある。

私の所属する大阪大学山岳会でも、会長はじめ大勢の会員が上述の日本山岳会会員である。マナスル遠征に協力しており、第三次マナスル登山隊員、ヒマルチュリ隊員に選ばれて参加している。これらの会員の力をもとに、大学を揚げての P29 峰初登頂を計画して、1961 年（昭和 36 年）に第一次、1963 年（昭和 38 年）に第二次隊を送ったが不成功だった。その後、ネパール政府がヒマラヤ登山を禁止したため中断して、解禁された最初の年 1969 年（昭和 44 年）に第三次隊を計画し、私も隊員に加えてもらった。勤務する会社に頼み込み、やっと 10 ヶ月間無給休職をとりつけた。「私がいなくても会社はびくともしないが遠征隊はつぶれる」とも泣き付き、山岳会会長からも嘆願書を書いていただいて、やっと許可をもらった。

この隊も不成功に終わり、翌年1970年（昭和45年）第四次隊が成功するのであるが、それに参加することはとても無理な相談であった。当時は外国旅行でさえ大変なことであり、まして通常の社会人であればそう気楽には海外登山等できるものではない。二度も三度も遠征登山を経験した人はごく限られた人、私から見れば非常に恵まれた人々であった。



4. カラコルム遠征登山への参加決心

第三次隊に参加してから6年たち、私の登山熱も冷め、結婚して一児の親となり、職場でも責任ある仕事をする年代に達していた。しかし山岳会中では次世代の「いだしっぺ達」が次の目標を探し続けていた。7000m級の未踏峰がのこりすくなくなっていく状況にじっとしていられず、カラコルムの未踏峰への遠征計画を立てていた。目標の山も固まり、隊員希望者も数人出てきて、後は隊長が決まればこの計画は実現する状況であった。

私に山岳部の監督から隊長を引き受けてほしい旨の打診があった。1975年（昭和50年）9月半ば、計画のいだしっぺ達に会った。彼らの未知への情熱は素晴らしいものであり、私の登山への血を沸かせるものであるが、そう簡単には決心がつかない。再び休職して行くことを会社が許すはずがない。2歳4ヶ月の長男を連れ、妊娠6ヶ月の妻に「会社を辞めてカラコルムへいくねん」などとは言い出せない。

一方山岳会の方では準備委員会の設立準備が始まり、どのような体制で遠征隊を送るかを検討するなど、本格的にカラコルム登山計画が動き始めていた。山岳会の会長に「P29峰のようなしゃちこぼった隊ではなく、半ば有志の隊にしたい。若い人が新しい遠征のやり方で実施してほしい」とまでいわれた。

妻に計画を打ち明けたところ、「止めたら行くのをやめる？」と言われたように覚えている。登山には遭難の危険があるが、こればかりは「けっして遭難なんかはしない」等と言っても安心してはもらえない。遠征費用の自己負担金は当時の大学卒業者の初任給の半年分になろうから、生活費と合わせて退職金でまかなえるかなと思った。ここで私は参加を決断した。家族達には背を向けた感じで、この罪悪感は今でも大きな負債として残っている。

5. 登山の魅力

人はなぜ山に登るのか？ヨーロッパの人々は古来、山には悪魔が住んでいると考えていた。登山ではなく向こう側に行く為に山の峠を越えていたが、山に登ることだけを目的にした登山は19世紀になってからである。日本では山岳仏教の影響が大きくもっぱら修行者達によって登頂されていた。奈良時代に3000mの高峰に登られているが、いわゆるスポーツ登山が始まったのは明治になってからである。またネパールヒマラヤでは聖なる山として崇められ、村に近いところには今なお人が登ることはゆるされない山がある。

ここでいう登山はスポーツ登山であるが、自然を相手とするスポーツにはヨット等のように冒険という要素が多分に含まれる。スポーツを楽しむと言うよりも、人の登ったことのない山に登るいわゆる初登頂を成し遂げる目的の方が強い。ヒマラヤの8000mの峰、特にエベレスト（8840m）は南極・北極に次ぐ第三の極地と言われ、世界中の人々が初登頂に注目した。「そこに山があるから」と言う有名なマロリーの言葉があるが、これは大きな誤解である。「なぜ（それほどにも）あなたはエベレストに登りたいのでしょうか」と言う質問に「Because it is there.」と答えたその it を「エベレスト」ではなく「山」と伝えてしまったのである。「初めて」と言う事は何事であれ素晴らしい価値ある事と誰しも考える。

日本には富士山(3776m)を最高に、中部地方に3000m級の山がある。ヨーロッパアルプスでは4000m、コーカサスでは5000m、アンデスでは6000mそしてヒマラヤでは7000mの山が連なっている。日本には未登峰はないが、未だ誰も登っていない登路が残されていた。

しかし日本の山には氷河がなくて物足りない。本場ヨーロッパアルプス等の4000m以上の高山では一年中雪が降り積もって氷河となり、我々日本の登山者にとって氷河を持つ外国の山はあこがれの的になる。



氷河：山の斜面から押し出された氷がわずかわずかわず流れている。

6. カラコルム遠征の計画と準備

カラコルムはヒマラヤ山脈の西端にある。一般的に言うヒマラヤ山脈は、西はパキスタンから東はブータンまで東西2500kmにわたる長大な山脈である。その南北では気候や植物の様子が全く異なり、また東西でも大きな差がある。ネパール・ヒマラヤにはモンスーンと呼ばれる雨季があり、山では豪雪となるので登山には不適切な時期となる。従ってポストモンスーンまたはプレモンスーンに登山をするが、カラコルムにはモンスーンがないので普通には夏に登る。

今回のいいだしっぺ達はこのカラコルム東部にあるシアチェン氷河流域に着目した。この流域はインド・パキスタンの国境付近である為、両国の紛争の度に入山禁止となる。また奥地でアプローチの長い地域である為、登山隊が入りにくい。したがって7000m級の未登峰が未だ幾つか残っている。1975年(昭和50年)に解禁となったが遠征準備が出来ず、第一目標としていたテラム・カンリ(7462m)は静岡大学隊に初登頂をさらわれた。

シアチェン氷河は世界第二の規模を誇る山岳氷河で1849年に発見・紹介され、以降1889年(明治22年)のヤングハズバンド、1909年(明治42年)のロングスタッフの探検・測量によってやっとその全貌が判りかけてきた。いいだしっぺ達はこれらの文献や、この地域に入った日本の登山隊の撮影した写真を頂いてきたりして、かなりの情報・知識を持っていた。隊長の私としては頼もしい限りであった。



7. 準備委員会の活動開始

隊長が決まってからは準備委員会で遠征計画書を作り、11月半ばに山岳会総会を開いて了承してもらって実際の活動を始めるようになった。隊員の選定は隊長の私に一任されたので、取りあえずいだしっぺ達の名を挙げ、総勢8人の隊とした。

次に、パキスタン政府に登山の許可申請書を出さねばならない。パキスタン政府は現地でのトラブルを防ぐために、同じ時期に複数の登山隊が入らないようにしている。我々の目標とするアブサラサスへの許可申請を誰かが既に提出していて、そちらに許可が下りていけば我々の遠征そのものが出来なくなる。従って目的の山名は第一希望から第四希望までを上げて、期間は1976年（昭和51年）5月から9月までとした。4つの山を念頭に置いても準備そのものに大きな違いはない。どうせどの山にも近づいた人間はなく、ベースキャンプ（登山基地となるテント地）までの大体のアプローチ・ルートは同じだからである。しかし第一希望の山について一番多くの資料を集めていたし、遠景写真も多く入手出来ているので是非ともこれに許可をもらいたかった。

1976年（昭和51年）2月18日に、第一希望の山アブサラサスへの許可が下りた時には関係者一同ほっとし、これで迷う事無くきちんとした準備が出来る事を本当に喜んだ。



8. 未登峰攻略の問題点

未踏峰を攻略する場合の共通の問題点は二つある。その一つは登路を検討する為の写真や正確な地図がない事である。今回の目標であるアブサラサスのあるシアチェン氷河流域は、殆ど人の入った事のない地域であるので、更に詳細な情報が無い。小人数の偵察隊を派遣して、それで得た情報に基づいて準備してから本隊をだすのが正攻法であるが、いまさらそのような時間的余裕はないし、それほどデッカイ山でもない。初登頂できれば最善であるが、シアチェン氷河流域の調査・踏査だけでも意義のある遠征だと思われた。また、大阪大学山岳会の誰も経験していないカラコルムを知っておきたいという会長の意向もあった。

もう一つの問題は、高度順化である。酸素濃度の低い高所に登る時には、少しずつ高度を上げて高さに順応しながら登らないと高山病にかかる。深海に潜る時にかかる潜水病の反対である。3776mの富士山頂に建設工事の為にヘリコプターで上がって、高山病にかかってその後遺症がいつまでも出る人がいる。高所順応が容易な人と順応し難い人がいて、中には順応できない人がいる。逆に、ヤクと言う牛の仲間（その毛は僧侶の使うホッスに使われる）は3000m以上の高さにいる動物で、低所では生きていけないので都市の動物園では生きていけない。

今度の登山では、目標の山アブサラサスの登山拠点とするベースキャンプ（標高5200m付近と計画）へ至る前に、5550mの峠を越えなければならない。5550mでの高度順化を完全にしないままに先に進んで、高山病の症状が現われたら引き返すのにまた5550mの峠を越さなければならない。これは非常に危険な事である。5550mでの高度順化が不完全であっても、峠を越えて4900mまで下りてしまうと不完全であった事が判らないままに先に進むことになる。高度順化が出来ているのかいないのかを見極めることが重要な鍵となる。



9. 高山への登り方

7000m級の山は短期間では登れない。ベースキャンプを基地にしてその上にテントを建ててキャンプⅠとし、その上にさらにテントを建ててキャンプⅡとして、順に高い所に上がって行く。私たちはキャンプⅣまでを建設して頂上をアタックする計画を立てた。この計画では隊員は8人が最適であると考えた。隊員が多くなれば使用する食料・装備が増して、機動力も減少する。

この基本計画が決まれば、テント・調理用のバーナーの数などが決まる。準備するロープの長さは、最低三つのキャンプの間を全長張れるだけが必要である。酸素ボンベは医療用に4本用意する事に決めた。6900m近くまでCIVを上げる事が出来れば7245mの頂上まで酸素無しで登れる。ベースキャンプから登り始めて下りてくるまで、50日以上はかけられない。高所に長期滞在が出来ないし、登山に適した天候の制限もあるからである。そうなるとベースキャンプ以上で必要とする食料は400人日分であることが決まる。

次に隊長としての決定は、日本からパキスタンの首都ラワルピンディ、ラワルピンディからスカルドまで、隊荷をエアー・パキスタンで空輸する事である。空輸する事により隊員に隊荷を最小限に押さえる工夫をしてもらう事と、パキスタン国内での通関・転送をスムーズに行える事をねらった。



10. 隊員と役割分担

遠征準備と登山スケジュールは、いいだしっぺ達の間で進められた。そのいいだしっぺ達の中に様々な都合で参加をあきらめたり、逆にあきらめかけていたが参加可能になった者がいて、最終的には下記の8名に決定した。隊員を8名に決めた理由は次項で述べるように、アブサラサス程度の山ではシェルパを雇わなくても、隊員が8人いれば隊員だけでも充分登れると考えたからである。また、キャンプを4段階まで上げるのに必要な隊員数は8人いればよいと考えた。平均年齢が27.25歳は当時としては若年の登山隊であった。

氏名	担当	職業	年齢	
三澤	隊長・気象・記録	無職(会社退職)	36歳	既婚(二児有)
T. I	副隊長	理学部大学院博士過程2年(留年)	29歳	既婚
K. K	会計	法律事務所勤務(休職)	33歳	独身
Y. I	輸送・渉外	会社員(休職)	28歳	独身

K. Y	装備	理学部大学院修士過程 1 年(留年)	25 歳	既婚
T. M	食料	工学部 2 年(留年)	21 歳	独身
S. Y	医療・梱包	医学部 3 年(留年)	21 歳	独身
T. M	医療・記録	研修医 (休職)	25 歳	独身

{三澤、T. I 君はそれぞれ第三・四次隊の P29 登山隊員であるが、後は T. M 君を除いて海外旅行も未経験である。}

登山を始めると隊員は分散してテントに宿泊するので、梱包された箱の中身を全員が知っていなければ生活していけない。各担当隊員の役割は責任者であって、全隊員が計画を理解した上で中身を把握していなければならない。キャラバン中の食料はこの様な献立、ベースキャンプまでの献立はこう、ベースキャンプから上はこの献立と言う基本的な計画は全員が了解したものであり、それ以降は食料係が責任を持って準備する。装備についても同様に、このキャンプから上にはこれだけの装備が用意してあるという認識を全員が持っていなければならない。同じ大学山岳部で長年一緒に山登りをしていると各人の得手・不得手を互いに知っているの、たった 8 人の隊では担当を選択しあうまでもなく自然に決まり、上に記したそれぞれの役割分担は適材適所であったと思う。

全期間にわたって必要な物資の総量が決まると、輸送費を削減する為に現地調達したいので、現地調達出来る物と場所を昨年パキスタンに行った人々から情報を集めた。ベースキャンプより高い所では軽量化の為に乾燥食品を使う。乾燥野菜、乾燥肉、乾物、メリケン粉、米を一度炊いて真空乾燥させたアルファ米などで、缶詰めや瓶詰めは殆ど使わない。燃料はキャラバン中では石油コンロと薪を使う。ベースキャンプより上では酸素が少ないので石油コンロは使えない。したがってプロパンガスを使う。医療器具、薬品の種類・量については遠征経験のある医者に相談して決めた。

11. 高所キャンプの進め方 (1)

話を進める前に理解して頂きたいのが高所へキャンプを出していく手順で、そのあとに必要な資材の区分けや梱包の工夫などについてお話ししたい。登山の基本は前に前にルートを伸ばし、前に前にテントを建てて行く事である。次に、常に二人または三人がロープで体をつないで行動することである。これを「パーティを組む」と言う。誰か一人がスリップしたり転落した時に止める事が出来るように、一人が動いている時は他の人は止まっていてロープを繰り出す。

傾斜が緩く安全な所ではロープを結んだままで移動する。これはクレバス(氷河の裂け目の事で深さは 100m を越える)に一人が落ちた時に止める為である。ヒドンクレバスといって、氷の裂け目を雪が覆っていてクレバスが見えない事が多い。パーティの組み合わせは隊長が決めるが、そのパーティの誰が先頭を進むかはその時々状況によって決まる。岩登りが得意な者、雪や氷を登るのが得意な者、あるいはその日その時の体調によっても決まる。キャンプとキャンプ間のルートのように多勢が幾度も通る所には、固定ロープを取り付けて早く安全に通過出来るようにする。



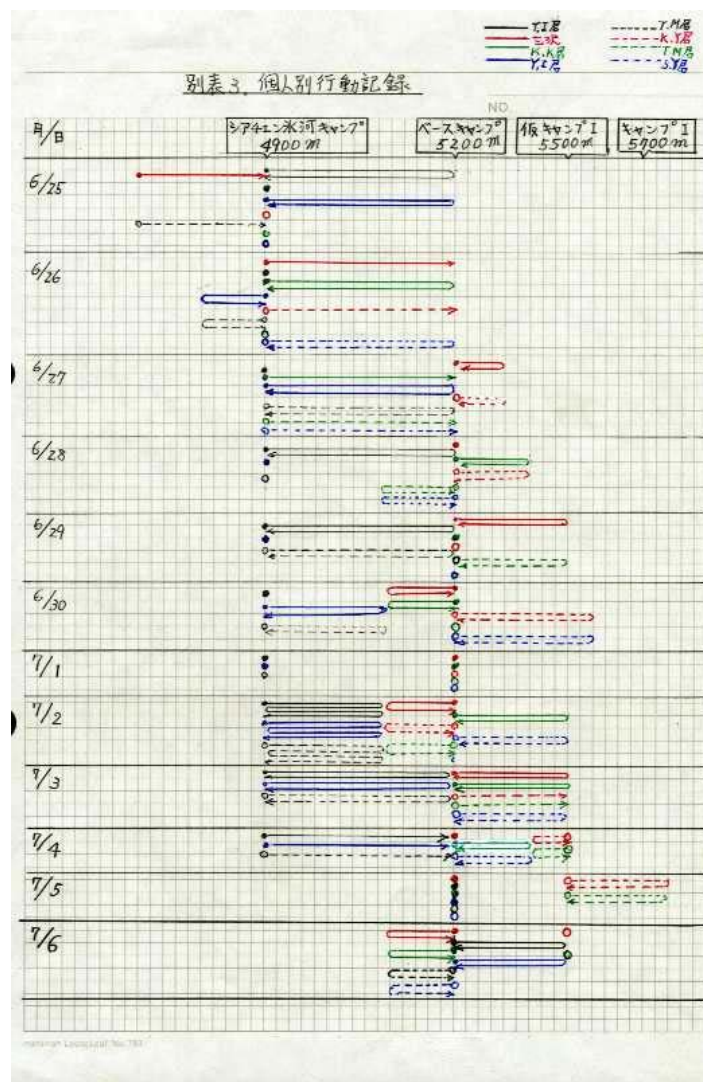
12. 高所キャンプの進め方 (2)

ベースキャンプを建設して、C I の設営地が決まった時の行動を例に挙げてキャンプの進め方を説明しよう。

C I を設営する時には、C I に泊まる二人と彼らをサポートする少なくとも二人、合計四人が登る。C I に泊まる二人は自分の寝具などを担ぎあげる。この高さでは一人が担げる荷物はせいぜい20kgであるから、テント・食料・燃料等はサポートする者が担ぐ。もちろん、C I の設営予定地を決めた時には既に少しの荷物は上がっているのであるが、更にその上のC II を建てる為に必要な荷物も上げておかなければならない。テント一つを設営するには最低100kgほどの荷物を上げなければならない。

C I に着くとサポートの二人はベースキャンプに引き返し、C I に泊まる二人がテントを張る。この二人は翌日更に前にルートを伸ばして、その日の内にベースキャンプまで降りる。ベースキャンプよりも手前のテントに居る人と、ベースキャンプに居る人と、C I に居る人は、交代して宿泊する高さを替えて、前方にルートを伸ばすか、荷物を運び上げるか互いに役割を交代しながら前進する。この事で高度順応をしながら、かつチームワークを確かめながら、高い所へ登って行く。

物資の荷揚げのペースや隊員の高度順応のペースを見ながら隊員のポジションを決めるのは隊長の仕事である。各人の行動した場所の高さを毎日記録して、全員が同じペースで高度順応していく様に行動記録表を作って管理した。隊員は2~4人のパーティに別れて行動するので、隊全体の行動と個人別の行動記録表を作った。



13. 物資の梱包

資材が集まり始める頃に遠征準備室として、他のキャンパスに移転して空いた理学部の教室を借り受ける事が出来た。ゆったりしたスペースに次々と資材が集まり、広い事務所には事務机を並べ、古いながらもソファも置いたので、深夜までの作業で終電がなくなった時には寝袋を広げて宿泊する事も出来た。先輩やカラコルム委員会の方等が激励の為に来室された。生まれたばかりの次男を妻にあずけ、3歳前の長男を連れて来て書類を作った事もあった。

ベースキャンプより高所で消費する食料は、約10kg単位で箱詰めする。箱に番号を付けて内容物をリストに記すが、これは食料係や装備係の仕事である。これはダンボール箱であるが、登山中はテントの外に置く事が多いので防水塗装をする。この時食料・装備・燃料等別に分類して色別する工夫もした。これを空輸の時に扱いやすくする為に外箱にまとめ、更に防水布の袋で覆う。現地では人の背中で運ぶので、一つの外箱の重量が40kgを越さない様に詰め合わせる。

日本からパキスタンに輸送する為にインボイスを作成し、パッキングリストを作る。これは輸送・渉外担当者の仕事であるが、一品毎に価格を表示する作業が面倒である。登山隊がパキスタン国内で消費する物は関税免除となるが、非消耗品についてはデポジットマネーを一旦支払って、それらを消費しないでパキスタンを出国する際に返却してもらう制度になっているからである。



14. 資金集め (1)

遠征資金は当初総額1,200万円の予算を立てた。ご参考の為に費目別にご紹介する。

単位 千円

円払い費用	8,500	外貨払費用	3,500
渡航費	2,800	都市滞在費	200
装備費	2,000	輸送費	220
食料費	500	キャラバン費	1,450
輸送・梱包費	1,300	現地物資購入費	550
保険料	800	入山料	300
事務・通信費	400	保険費	250
医薬品・予備費	700	通信・予備費	530

立案時は1\$=300円であったが実際には少し円高となり、また食料・装備は現物寄付を多く頂けたので、決算はかなり下回った。

本来遠征登山は隊員の自費負担であるべきとの意見もあるが、負担が多すぎて隊員希望者がいなくなる。当初、自己負担金を当時の大学卒業者初任給の半年分程度と計画し、不足分を遠征計画にご賛同を頂ける方々にご寄付を依頼する。山岳会会員にはもちろん、外部の個人・企業にもお願いして回った。山岳会会長・山岳部部長名の遠征計画書と、カラコルム委員会(大学総長はじめご賛同を得られた方々の名前を連ねた)の趣意書を添えて、募金活動を3ヶ月ほど行った。山岳会OBはもちろん親しい大阪大学のOBに紹介を頂いて歩き回った。

世の中は石油ショックの後であり、円が自由化になったり、不況の只中であった。公共事業の会社では「主婦連の突き上げが強くてねー」と断られたり、思いがけない額を頂いて感動したり、隊長の仕事の一つとして懸命にこなした。36歳の若輩であるから気楽に出来た事であり、教授・助教授クラスの隊長であれば話しは違ったであろうと思う事もあった。巷ではロッキード事件が持ちきりで、田中元首相の国会尋問の様子をカーラディオで聞きながら走り回った。

15. 資金集め (2)

有りがたかった事は、現物寄付は意外に快くたくさん頂けた事であった。食料・装備担当者が夫々に必要な品目の寄付を依頼して回るのであるが、現地で調達出来る物については輸送費と比べてどちらが有利であるか輸送担当者が会計担当者と議論する事もしばしばであった。クレバスを渡る時に使用する組み立てはしごの継ぎ手を材木屋で作ってもらった時、非常に面倒くさがられて高い代金を支払ったが、後日遠征隊の新聞記事を見たと言って、倍以上の送金を頂くという楽しい事もあった。

カラコルム委員会は毎週定期的に開催して頂き、準備の進捗状況や隊長として決定した方針なりを報告した。とりわけ募金状況は重要な議題であって、新訪問先の紹介をして頂いた。時には各担当のや委員も出席して直接準備状況を報告したり、助言を受けたりした。若い隊員にとっては大先輩にご馳走して頂きながら、未だ見ぬ山の話をする事は非常に光栄であり喜びであったと思う。



現地で準備中の梯子

16. 日本脱出

登山許可を得て2ヶ月余りで隊荷を送り出す事が出来た。5年前にP29峰へ行った時に比べると、渡航手続きも外貨の入手も検疫制度もはるかに簡単になってはいたが、それにしても驚異的なスピードであった。各隊員は準備の合間に暇を見つけては、個人的に身辺整理をしながら出国体制を整えた。隊の出国後の留守事務所と連絡先責任者を山岳会OBに引き受けて頂けた。パキスタンから発送する予定の、ご協力者へのお礼状も印刷した。自分達の楽しみのためとはいえ、遠征登山の準備は本当にしんどいもので、全てが完了すると「いざ日本脱出」と言いたくなる気持ちになる。

4月26日、先発隊にY. I君とT. M君を選んで本隊より一週間前に出発させた。T. I君には後始末を確認させ本隊より一週間後に出国させる事にした。先発隊には既に発送した滞荷を通関し、その保管場所を探したり、関係する役所の所在を確認したり、本隊の宿泊するホテルを探したり等々の任務がある。初めての外国で慣れない仕事をさせるために、両君には安心して出発出来るように、奮発してラワルピンディの著名なホテルを日本で予約してやったところ、ラワルピンディ滞在の日本隊から「裕福な隊だ」との風評を流されて、大変困惑していた。と言うのは、ここではタクシーも料金のメーターを倒さないように物の定価が無く、金持ちはせい一杯ふんだくられるからである。

5月3日、本隊5名は山岳会長・先輩・家族の見送りを受けてパキスタン・エアラインで伊丹空港を出発した。隊員達は意欲満々、只一つの悩みは金欠病。だがご家族達にとっては「只只無事に帰ってきてほしい」だけ。「絶対に遭難だけはしないで帰ってくるぞ」。



花とピッケル・標高4000mの地点にて

17. パキスタンの首都ラワルピンディにて (1)

伊丹空港を離陸した飛行機は羽田経由で北京に立ち寄り、給油して定刻にラワルピンディ着。懐かしそうな笑みを浮かべた先発隊の二人に迎えられ、用意してくれたバスとジープに分乗してミセス・デーヴィスホテルに入った。安い上に広い庭が有り、荷物の梱包にも便利である。いいホテルを見つけてくれたと誉める。

役所へ本隊到着の挨拶に行くと、我々の隊に付くリエゾンオフィサーは、陸軍大尉モバッシュヤーに決まっているとのこと。当時は軍事機密がうるさくて、橋や道路などの写真撮影は禁じられていて、辺境の地に入る外国人パーティの保護・援助か監視のためか、必ず連絡将校(リエゾンオフィサー)を付けられる。彼の食費は我々持ちで専用コックを付けなければならないし、登山靴・ピッケル等の隊員並みの装備を支給した上に、それらの荷物を運ぶポーターも付けてやらねばならない。歓迎されない客人であるが断るわけにはいかない、いや今後パキスタン側の窓口となる男であるから友好的関係にしておかなければならない。リエゾンオフィサーとけんかして途中から引き返した隊もあるそうだ。日本側の窓口としては隊長の私が付き合わねばならない。夕刻には、早速ホテルにやって来た。

23歳の張り切りボーイで、登山隊のリエゾンオフィサーを勤めるのは初めてとの事。パキスタン政府に提出してある我々の計画書に基づいて概略説明して、現地情勢によっては若干の変更を認める約束を取り付けた。その翌日彼に用意した装備を見せ、隊員の装備と見比べて満足させた。



リエゾンオフィサー (向かって右)

18. パキスタンの首都ラワルピンディにて (2)

ラワルピンディでする仕事の一つは役所との折衝である。Foreign Registration Office で Visa をもらい、トランシーバーの使用許可をもらった。購入予定物資の内、砂糖・塩・小麦粉・灯油等はスカルドで公定価格で買えることになった。その分だけラワルピンディからスカルドまでの輸送費が節約できた。また心配していたプロパンガスの空輸も公認された。Radio Pakistan に気象通報を申し込み、我が隊のいる地域の気象情報を前期は4.02MHz、後期は5.01MHz で17:25から流してくれることになった。

予約しておいた時刻に日本大使館を訪問して根本大使にご挨拶した。次の仕事は物資の購入と梱包であるが、ここでは日中は暑くて12:00~16:00は役所も昼休みで仕事にならず、思うように捗らない。

更に、パキスタンやアフガニスタンでは入国4~5日で必ず現不明の下痢に見舞われる(3~4日で自然に治るものであるが)。幸運にも全員が同時に罹らなかったので、元気な者が仕事をした。最終的には全員が下痢を経験して、カラコルムへの入山資格者となったような気がした。

最後の仕事はUS\$をパキスタン・ルピー (RS) に交換するだけである。ポーターへの賃金の支払や食料の支払いが主であるから、10RS以下の小額紙幣を揃えねばならない。嵩張る紙幣をリュックサックに詰め込んで持ち帰り、隊員が分割して運ぶことにしてそれぞれ秘密に各自の荷物の中に入れた。

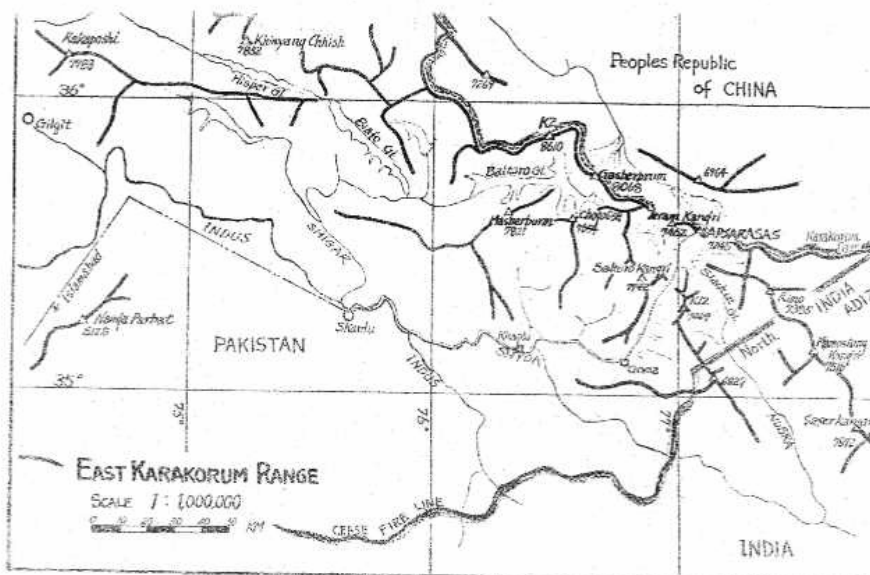


19. パキスタンの首都ラワルピンディにて (3)

ここで我々の旅程を述べておく。ラワルピンディから荷物も人もスカルド空港まで飛び、ジープでスカルド市内に入る。ここで最終的に物資を調達して車道最終の町カバルまでジープで入る。カバルからは徒歩でインダス河沿いに進むいわゆるキャラバンの旅である。荷物は人に担がれて4日で最奥の村ゴマに達する。ゴマからは氷河沿いに右岸から左岸へと渡りながら遡行するが、2日で再奥の放牧地ギャリに着く。ここからは緑ともお別れで、氷と雪の世界を標高5500mの峠・アリブランサまで登り、シアチェン氷河(4900m)に下り、テラムカンリ氷河を遡行してアブサラサス氷河との分岐点にベースキャンプ(5200m)を建設してキャラバンが終わる。我々のキャラバンは5月24日から6月26日までの33日間に及び、それから本当の登山が始ったのである。

ネパールヒマラヤの登山ではシェルパの活躍が伝えられるが、シェルパとはネパールからチベットにかけての高地に住む部族のことで、イギリス隊が古くからポーターあるいは登山の補助者として雇用した。経験を積んだシェルパ達の中には優れた登山技術を身に付けた者も多くなり、彼らのことをシェルパと言うようになった。エベレストにヒラリー卿と初登頂したサード(シェルパの頭領)のテンジン・ノルゲイや、マナスルに今西寿雄氏と初登頂したギャルチェン・ノルブ等は国民的英雄になっている。しかしカラコルムではこの様な人達は育てていないので、インドやネパールに住むシェルパ達をわざわざ連れてきていた。

我々のような小規模隊ではそのような贅沢を言っていられない。ベースキャンプより上では隊員だけによる登山を行うことにした。パキスタン政府はポーターを高所ポーターと低所ポーターに区分し、賃金はそれぞれ一日一人60, 40RS(パキスタンルピー、1RSは約8円)として、高所ポーターには装備を与えるように決めている。私は低所ポーターだけを100人雇ってゴマまで行き、その内の優秀な20人を選んで装備を与えてベースキャンプまで働かせる計画をモバッシャー大尉に伝えて了承してもらった。その100人にも保険をかける事が規則で決まっている。彼の主張を受け入れて127人の保険をかける事にした。合計10,800RSなり。



20. ラワルピンディからスカルドへ

都市滞在費の削減のため、3食付きホテル生活を最短とするよう全員懸命に働いた。荷物をトラックに積んで空港に送り、パキスタン・エアラインに渡した翌日の5月11日、8日間滞在したホテルを後に空港に行く。空軍のC130機の後部から乗り込み、軍用ト

トラックの傍らにうずくまって12:15に離陸したと思ったら気流が悪いとかで引き返し、12:30空港に逆戻りした。ホテルに帰ると、ちゃんと元の部屋が空いていて入る事が出来た。同じ首都でありながら、東京では想像できないゆったりとした生活のペースである。

翌12日は5:00空港に着いてチェックイン。前のパキスタン人の乗客が上着のすそを持ち上げてガンベルトをはずしてカウンターに預けたのには驚いた。8:15離陸、インダス河に沿って上流に向かい、山頂を雲で覆われた魔の山ナンガバルパートの中腹をかすめて飛ぶ。憧れの7000mの山々の姿に接し胸が高鳴る。9:00に砂漠の中のスカルド空港に着陸し、積み荷を下ろすと飛行機はさっさと離陸していった。荒々しい砂漠の中の空港に放り出された感じである。数台のジープがばらばらにやって来てピストン往復で荷物を運び、やっとスカルドの街のゲスト・ハウスに落ち着いた。

インダス河の河岸段丘にある、ひよろひよろの柳並木とブーゲンビリヤの他には緑の無い、マカロニーウエスタンに出てくるような殺伐とした街である。翌朝起きると虫に噛まれた後があり、よく見るとダニであった。昨日のジープ代1580RSを請求され、石油を買いに行った者が僅かの隙に6500RS盗まれた。全く油断の出来ない街である。Tourist Office, Police, Magistrateを回っても埒があかず、紛失届けを出しただけで結局は泣き寝入り。必要な物資を購入したらこんないやな所からは早く逃げ出したい。この河沿いの最奥の街での購入物資は、砂糖・小麦粉・灯油・塩等で、約束通り公定価格で入手出来たのがせめてもの幸いであった。

ベースキャンプより高所では、燃料にはプロパンガスを使い、食料は殆ど乾燥野菜を使う事は既にお話したので、ここでキャラバン中の我々隊員の食事メニューをお話しておく。燃料には薪か石油コンロを用いる。主食は米飯や、小麦粉を焼いたチャパティである。日本人の口に合う炊飯用の米は、パキスタンでは下等米である。時には日本から持参したうどんやそうめん、インスタントラーメン等が出てくる。通過する小さな村の収穫量は知っているから食料はまず手に入らない。そこへ100人以上の隊列がやって来るから、村は大騒ぎで1週間くらい前から噂は伝わっているらしい。

ポーター達もいくらかの食料は持参しているが、殆どは村村で調達しているようである。従って我々日本人の手に入る物は、果物・卵・鶏・羊肉くらいであるが、値段を高くふっかけられるからめったに口に入らない。食料係が苦勞して献立を考えて食材を揃えてくれると、調理する隊員も腕によりをかけて、旨い飯を作る。何しろ食事は最大の楽しみであるから。

21. カパルの村からキャラバンの開始 (1)

スカルドから車道の終点の町カパルまでは64マイルの旅程。運転手付きのジープ7台を雇い、隊員8名・リエゾンオフィサー1名がそれぞれに乗り込んで荷物を詰め込んだ。5月18日、10:00に出発した。道路はもちろん舗装してなく、わだちが深く掘れたり岩があったりで車体は小船のように前後左右にゆれる。その上おんぼろジープで、よく故障して止まる。その度毎に運転手が修理して不思議な事に動き出す。器用なものである。

しかしついに後方の1台が「デファレンシャル・ギヤを壊して動けなくなった」といつてきた。よりによって会計担当者のK. K君が乗った車で、金庫も乗っている。心配なのでY. I君が乗った車を後戻りさせ、残り5台で前進してカパルに着いてから1台の空ジープを迎えに出す事にした。

14:30カパルに到着して河畔のこぎれいなレストハウスに入る。荷物を全部降ろして整頓していると、残りのどの車が故障車の荷物を取りに行くかをめぐって、5人の運転手がものすごい言い合いをしている。人と荷物をカパルまで運ぶ契約であるから追加料金は払わない。運転手としては只働きとなるのか。モバッシュャー大尉殿にお任せして荷物の整理し、夕食の準備をしていると20:00に残りの2台が到着した。

ここカパルはインダス河の支流シヨーク河に沿った、狭いながらも緑の豊かな町というより村で水田もある。両岸には5000m級の山が迫り、雪がかなり低い所まで残っている。ゆったりとした気分で休養できそうで、キャラバンに入る体勢を整えるにはうってつけの場所である。村の役人を呼び、モバッシュャー大尉を交えて、先の道路事情やシヨーク河の渡河地点等の打ち合わせをした。

ラワルピンディでの政府との取り決めには無かった様々なポーターへの追加支払いが出てきた。河の渡船代、薪代、実働6日につき1日の有給休日等などである。予算が厳しくなったのでポーターは93人に減らし、運べない荷物はここに残す事にして保管場所を提供してもらった。ドクターが高所医学のデータを取る為の眼底カメラ、氷河の距離・傾斜測定用のトランシット、エンジン発電機等である。

ポーターは93人雇用し、その中から代表者を2人選んでモバッシュャー大尉との交渉に当たらせる事等の条件を役人に伝えた。5月20日9:30から選考を始めると言うのでT. M君と言ってみると130人のポーター希望者が集まっていた。役人は130人の名簿を作ってきているが、我々はその中から93人を選びようにも選びようが無い。人選は役人と大尉に任せて、保険会社へ名簿を届けてもらうようにして、代表者も選出させるようにした。



22. カパルの村からキャラバンの開始 (2)

5月24日キャラバン出発。6日間の滞在中に付近の山の雪もかなり少なくなった。雨は時折降るだけであるが雨具の支給を要求するので、100個用意していた簡易カッパを見せると大尉は満足して得意満面にポーターを説得した。ポーターの運ぶ荷物には一つ一つ番号札を付け、それと同じ番号の札をポーターの首に付ける。下足番と同じ方法で、給料の支払の管理にも便利な日本人の考案による方法である。

ポーター達は担ぎ易そうな荷物を我勝ちに奪い合う。重いと言ってくるのは判っているのでバネ秤を用意していて大尉立ち会いのもとで計ってみせて納得させる。二日目からは同じ番号の荷物を担ぐ事になっているので、とにかく初日は大変な混乱の中でキャラバンは出発した。

ポーター達はグループを作って、それぞれかつてな速さで歩いてかつてに休憩しながら進むから、隊列は1km以上の長さになる。隊列の先頭と最後尾に隊員を二人ずつ配置してトランシーバーを先頭隊員と最後尾の隊員が持ち定時に交信する事にした。

シヨーク河沿いに河原を歩いたり、断崖の岩棚のような栈道を歩くのだが、緑は全く無い。突然緑のオアシスが現われると、そこには村がある。宿泊は必ず村の外れにテントを張ってであるが、一日の行程はポーター任せである。普通の旅では東海道53次のように昔から決まっているようだが、大尉は朝から今日の宿泊地をやかましく問いただしている。途中で一度シヨーク河を渡った。細い材木を結び合わせた筏の底に、羊の皮袋をふくらませて浮きとして取り付けた、危なっかしい乗り物で、恐がって乗ろうとしないポーターもいた。最奥の村ゴマからはビラフォンド氷河を遡行する。兩岸の沢から押し出された岩石を乗り越えて進むのだが、所々に放牧地があり、牛や山羊や羊が草を食んでいる。簡単な柵があったり、寝泊まりできる岩穴があったりする。天候に恵まれて停滞する事もなく、6月1日に9日間でナラムという最奥の牧草地に着いた(標高4450m)。



羊の皮袋をふくらませて浮きにした筏

23. 峠越えのキャラバン (1)

ここナラム(標高4450m)からは本格的な氷河を歩く。氷と雪と岩の世界であるから、ポーター達は今までのキャラバンのように岩陰に毛布に包まって寝るわけにはゆかない。

90人ものポーターが寝泊まりするテントや寝具を準備するよりも、少数のポーターに何日も往復して荷物を運搬させる方が得策である。日数はかかるが、その間に我々隊員は前方に偵察隊を出してルートを見つけて、安全に通れるように工作しておく必要が有る。そこで氷河を歩いた経験があるというポーターの中から21人を選び、靴・ヤッケ・寝袋・テント・石油コンロ等を支給した。当初からの計画であるから、彼らの食料はカパルで責任者の希望どおりの品を購入してある。

峠越えのキャラバンは、ポーターの荷物運搬隊と隊員のルート工作隊とが別行動になる。ポーターは出来るだけ高度の低い所のテントで泊り、次のテント場まで荷物を上げ終わったらテントを移動する。つまり最初、ポーターはナラムにテントを張って泊まってアリブランサまでの荷揚げをする。全部運び終わってからアリブランサまでテントを上げて泊り、峠までの荷揚げをする。ここからは人間の住む世界でないから、道は一切無い。ポーター達の荷物運搬隊が通過出来るように前方の偵察をして、安全に通れるようにルート工作しておく。

偵察隊・工作隊は8人の隊員が交替で編成して、それ以外の隊員は荷上げをする。ポーター一人の担ぐ荷物は25kg以下に計画しているから、1個あたり10もしくは20kg程度の重さに梱包してある。運搬する荷物の順番を各梱包の番号で指示しておいた。リエゾンオフィサーのモバツチャー大尉にポーターの管理を依頼した。

峠越えキャラバンの宿泊場所は次のとおりである。

(テント設営日は設営地点に決定し、必要最小限の荷物が上がった日である。)

ナラム (標高4450m, 6月2日出発)

↓ ポーター21人で3~4回往復

アリブランサ (標高4850m, 6月4日テント設営)

↓ ポーター21人で3~4回往復

ビラフォン峠 (標高5550m, 6月9日テント設営)

↓ ポーター7人で8~9回往復

ロロフォン氷河 (標高5200m, 6月12日テント設営)

↓ ポーター7人で8~9回往復

シアチェン氷河との合流点 (標高4900m, 6月19日テント設営)

↓ ポーター7人で8~9回往復

ベースキャンプ (標高5200m, 6月26日テント設営)

24. 峠越えのキャラバン (2)

隊員はアリブランサからビラフォン氷河を毎日登って峠へのルートを作っていく。氷河は百メートルもの厚い氷でできていて、一年間に数十メートルから数百メートルというゆっくりとした速さで流れている。氷には延性がないので、流れの傾斜がきつくなった場所では氷の表面が割れる。これがクレバスという氷の裂け目で、流れ方向に直角に割れている。

クレバスの大きさは様々で、人がまたいで渡れる物も有れば、5メートルの梯子も届かない物も有る。渡れない程幅の広いクレバスに行き当たると、幅が狭くなるまで左か右に歩かなければならない。時には百メートル以上も左右に歩くので、効率よく高度を上げる為には大きなクレバスの少なそうな所を選んで登る。氷河を歩いた経験が多い者ほどこの洞察力が確かである。

幅が数百メートルもある氷河を歩いている者には局部的にしか見る事が出来ないから、予め登路を望遠鏡で観察して見当を付けておく。また、登っている者にアリブランサのテントにいる者が、望遠鏡で見ながら進路をトランシーバーで指示する。

小さいクレバスには割れ目を雪が覆っていることが有り、その上を歩くと雪を踏みぬいてクレバスに落ちる危険が有る。このため氷河上では二人または三人のパーティがロープで身体を結び合って歩く。ストックやピッケルで一歩先の足元を探りながら歩く。先に述べたように氷河はゆっくりながら流れているので、クレバスの幅が広がり、新しい割れ目が出来たりする。3~4日経つと登路を変更しなければならないこともある。

このように安全なルート確保して、降雪によって足跡が消えても登路が判るように赤旗を立てて行くのは隊員の仕事である。隊員といっても氷河の上を歩いた経験者はT. I君と私の二人だけである。後の6人は氷河に関しては初心者であるので、最初は彼らにクレバスの危険性を注意しながら、氷河の歩き方を教えた。



氷河（黒い部分は氷河が運んできた岩くず）

25. 峠越えのキャラバン (3)

アリブランサのテントは氷河の上に堆積した岩屑の上に立てた。緑の無い荒涼とした所で、近くに尖ったローソク状の巨大な岩塔がそびえている。高さは700メートル近くあるうか、中腹に雲がかかると凄みがある。ここは既に4850mの高度であり、私とT. I君を除いた6人の隊員にとっては初めて経験する高さである。最初は軽い頭痛を感じた者もいたが、食欲も旺盛で、高度障害は見られない。



ローソク状の巨大な岩塔

高度障害は高い所では気圧が低くなる為に起きる高山病のことで、深海に潜った時に起きる潜水病の逆現象である。標高と気圧の関係は概略次のようになる。

標高	気圧	
0m	1013 ヘクトパスカル	1 気圧
3000m	700 ヘクトパスカル	
3500m	657 ヘクトパスカル	2/3 気圧
5500m	505 ヘクトパスカル	1/2 気圧
7000m	410 ヘクトパスカル	

8000m	267 ヘクトパスカル	
8500m	248 ヘクトパスカル	1/3 気圧

富士山は3776mの高さであるから2/3気圧よりも少し低い程度であるが、やはり軽い頭痛を感じる人がいる。ピラフオンド峠は5550mの高さであるから1/2気圧しかない。水は80℃余りで沸騰するから米は煮えない。食料はアルファ米を使う等只あたためるだけで調理できるものに限る事は前に述べた。

気圧が1/2であるから酸素濃度は1/2よりも小さい。紙巻たばこに火を付けて、じっと持っているとお消えてしまう。かといって、消えない様に吸い続ける事が出来ないほど呼吸が苦しい。高度障害は、精神的・感覚的遅鈍や頭痛・嘔吐などの自覚症状に現われる。

26. 峠越えのキャラバン (4)

ポーター達には4~5人ずつロープで身体を結んで歩かせるのでクレバスに墜落する危険はない。初めての高所に上がると頭痛を訴える者が出るが、これは軽い高山病であるから言って聞かせて低い所で休ませれば簡単に治る。ナラム(標高4450m)からアリブランサ(標高4850m)へ上がる時も、アリブランサからピラフオンド峠(標高5550m)へ上がる時も同じであった。

しかしポーター達がピラフオンド峠に荷物を全部峠に上げ終わったら、峠には泊まらずに、次のロロフォンド氷河のテント(標高5200m)まで下りて泊ませた。そこから峠まで逆に荷物を取りに戻らせる事により、ポーターを出来るだけ低所に泊ませるようにした。

我々隊員は最終的には7245mの登頂を目的としていて、そこまでの高度に順応していかなければならない。少なくとも5550mの高さには完全に順化しておかなければ、もしベースキャンプ(標高5200m)で病気になったりして引き返す場合、いやでも5550mの峠を越さなければならない。完全な順化を早くする為、またそれを確認する為に、わざわざ峠のテントに泊まったり、一度低いテントに泊まってから再び峠のテントに戻ったりしながら荷物を運んだ。そして、ベースキャンプまでのルートの偵察隊を出した。

6月7日、ピラフオンド峠に到達。向こう側には遠くシアチェン氷河が見下ろせる。更に遠くに目標の山アプサラサスの姿を見て、「遠くからついにここまでやって来た」と感無量である。



ピラフオンド峠に到達した隊員

27. シアチェン氷河を横断してベースキャンプへ

6月9日、峠にテントを設営しポーター達の荷揚げが始まった。隊員はロロフォンド氷河を下って、シアチェン氷河の横断地点を決める為に先行する。

6月12日、荷物が全部峠に上がった。ここからは荷物を担いで下るので少し楽になる。

また、シアチェン氷河の横断地点を探したり、テラムシェール氷河の偵察をしてベースキャンプを設営するまで日数がかかる。その間に荷物は少しずつ運べば良い。そこで、21人のポーターの内14人を解雇して、残り7人のポーターで十回程往復して荷物を運ぶことにした。

モパッシャー大尉は14名のポーターを連れてゴマまで下り、ゴマの村で我々の帰着を待つ事になった。彼も峠まで同道して任務を半ば終えてほっとし、また高度障害が嫌になったのであろう。

6月19日、シアチェン氷河の横断地点を決めてテントを設営した(標高5490m)。

シアチェン氷河は幅数キロメートルの大氷河である。氷河と言えば平坦な氷の面だと思いがちだが、河の中に堤防のような流れに沿った帯状の起伏が幾筋もあって、それを乗り越えて行く。ちょうど砂漠を進む時に砂丘を越すのと同じで、行く先がどうなっているのか見通せない。この筋状の起伏は、シアチェン氷河本流に何本もの支流氷河が流れ込み、それらの支流の氷河が削り取った岩屑を運んで来て出来た岩屑の堤防である。

このシアチェン氷河を横断するのに3時間ほど要するが、氷の上とは言え日中は真夏の太陽に照りつけられて暑い。しかも氷上の雪が融けて氷河の表面を河となって流れる。カラコルム特有のアフターヌーンフラッドで、幅広い河では組立て梯子を渡して橋とする。

シアチェン氷河を横断するとその支流であるテラムシェール氷河に入る。このあたりの氷河はクレバスが無いので危険ではないが、最短距離を進もうとしても堤防状の起伏に遮られて見通しがきかない。堤防の頂上毎に赤旗を立てて、それを見通しながら進路を訂正する。偵察隊が先にルートを延ばしている間に、ポーター達はせせせと荷物を運ぶ。隊員は出来るだけ長期間高所に滞在したいので、峠からの荷降ろしは隊員がやり、ポーターにはロコフォンド・テントから先への運搬をやらせた。



28. 8人の隊員だけの登山(1)

7月8日、ベースキャンプ(標高5200m)に全部の荷物を上げたのでポーター7名を解雇した。

登山活動は30日間を予定しているので「8月12日にベースキャンプまで10人のポーターを迎えにこさせるよう」依頼した手紙をリエゾンオフィサーに書いてポーターに預けた。ポーター達は「We shall go home.」と嬉しそうに去っていった。8月12日にここへ来る約束を果たしてくれるか?いささか不安も残るが、思えば6月2日から約35日間という長い長い峠越えのキャラバンであった。車道の終点の村カパルからは歩いて45日の旅であった。

これから約30日間、隊員8名だけの登山を開始する。これからはポーター達の事は考える必要がなく、単純な山登りだけに専念すればよいのだ。雪崩の発生する危険な斜面を横切らないでも登れそうな尾根伝いのルートを選んで取り付いた。傾斜はきついがロープを固定して墜落を防ぐ事は出来る。岩肌が露出している部分は少なく、殆どは氷の上に1m程の雪が積もった急傾斜の尾根斜面ばかりで、ロープ伝いに登る緊張の日々の連続であった。

岩には岩用の釘を割れ目に打ち込んで、金具にロープを通す。雪面には長さ40cm程のアルミ製の支柱を打ち込んで、金具を取り付けてロープを通す。ところが、午後になる時には雪が融けて支柱が抜けそうになっている。天気の良い日は毎日、一本一本打ち直しながら下る。

2日後の7月10日には必要最小限の荷物を上げ、CⅠ(標高5700m)を設営した。CⅡへのルート偵察・工作する隊員と、ベースキャンプからCⅠ・CⅠからCⅡへの荷揚げする隊員とが、交替しながら働いた。しかし、隊員だけでは少しずつしか荷物は上げられず、CⅡ(標高6200m)を設営出来たのは10日後の7月20日であった。

登山もこの段階に入ると、キャラバンとは違って毎日の行動場所・パターンに変化が無くなる。酸素が少ない為に息が苦しく、20kg近い荷物を担いで、只黙々と登るだけの毎日である。二歩歩いては立ち止まり、三歩歩いてはまた立ち止まる。

皆何を考えながら歩いているのだろうか。尋ねた事もないし、私自身もあまり記憶していない。



29. 8人の隊員だけの登山 (2)

C I (標高5700m) に5人、C II (標高6200m) に3人の隊員を配置して、C I からC II への荷揚げとC III へのルート工作を進めた。標高6000m にもなれば、さすがに強い高度障害が現われてくる。思考力・記憶力共に鈍り、頭痛・吐き気等の身体的な症状も現れる日もある。

C I にいる私は、トランシーバー交信によってC II の状況を確認して指示するのであるが、発信者も受信者も正常な会話が来ていなくて、正確に状況を把握できない事がたびたび起きる。体調の悪い者が出て思うようにパーティが組めない日もある。そこでC II への荷揚げを先ず完了させ、C I ・C II に分散していた隊員全員をC II に結集させた。これで隊員達の調子もC III へのルートの状態もつかむことが出来るようになったので適切な指揮をとれるようになった。

7月26日にやっとC III (標高6700m) を設営したが、翌日から8月3日まで天候不順が続いて行動できず、テントにじっとしていた。読書かおしゃべりか、あるいは寝袋の中で眠るかの毎日である。登山活動は30日間を予定しているので、食料・燃料共に一日当たりの消費量は決まっているが、許される範囲内で手の込んだ調理をして退屈な時間を過ごした。

8月4日、やっとアタックキャンプとも言うべきC IV (標高7000m) を設営して、4人の隊員が入った。身体が絶好調の2人をアタック隊員にして、他の二人にサポートさせるつもりであった。頂上までのルートが易しく、好天が続くのであれば第一次アタックに2人、第二次アタックに2人を出せるかもしれない。

C II の2人も支援の為にC III に上げた。これでC III に4人、C IV に4人の配置となりアタック体勢に入った。計画では隊長の私はC II 止まりで、アタック隊が安全に下山できるようC IV からC I までのルートを整備しておく予定であったが、30日間の登山期間が後1週間しかなくなった今、そういう余裕は無い。下山する時には先ずルート工作隊を出して安全を確保してから荷物を運び降ろす事にしたのである。



固定ロープを使って急な雪壁を登る隊員

30. 初登頂なる

8月5日も風雪で全員行動できない。高い所でじっとしているCIVの4人の事を心配していると、8月6日の朝CIVの一人が体調を崩したという連絡が入り、風雪の中3人を連れてCIVにむかう。雪に埋まったCIVを掘り起こして帰ろうとする時、突然に青空が見えた。「CIVには後三日分の食料が有る。是非アタックさせてくれ」と心強く3人が申し出た。私は彼ら3人に望みを託して5人でCIIIに下った。

翌8月7日は快晴で明けた。体調を崩した者にはドクターと2人のサポーターをつけCIIまで降ろして、私一人CIIIに残った。

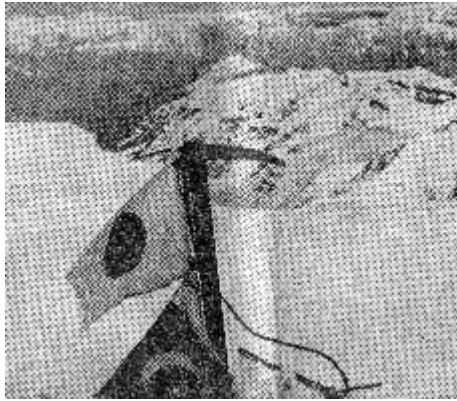
CIVの3人から出発するとの交信を受けた。ここCIIIから頂上（標高7245m）は見えるがそこに至る登路は見えない。テントからずっと頂上を眺め、三人の事を思い続けていた。突然、頂上に小さな小さな人影が見えてすぐに、登頂の連絡が有った。トランシーバーでがなりたてる声は興奮していて聞き取れない程である。Congratulation! と叫びながらも、下降時にスリッパしないよう気をつけるよう注意を与えた。我が人生最良の日の一つである。

頂上で登頂の証拠ともなる360度の背景写真と、頂上でピッケルにパキスタンと日本の国旗を取り付けた写真を撮って来たのであるが、両国の国旗の上下が逆であるとの指摘を帰国後に受けた。「国旗を付ける練習はしていなかったな」と笑った事である。

3人の登頂隊員は寝具・衣類などの他は安全に下降出来るだけの荷物を担いでCIIIに下りてきた。登頂の感激を繰り返し話してくれた。CIIにいる4人も共に喜んだ。第二次登頂隊を出せる余力も無かったが、それぞれの役割を果たして初登頂出来た事を心から満足していた。遠征準備を始め、登高をしている頃は誰も「自分が頂上に立ちたい」と気負っているのは当然であるが、最後の瞬間では隊に一体化して、隊の成功に満足するものである。野球にしてもフットボールにしてもチームプレーのスポーツではそうした物である。

7月8日に出てから実に35日ぶりの8月11日、ベースキャンプに帰った。6人用テントの周りの氷が溶けて、テントは1メートル近くも高い氷の上で傾いていた。ゆったりとくつろいでテントを張り直して、食料係がここまで隠し持ってきた清酒「沢の鶴」720ccビンを開けた。

8月12日、約束通り10人のポーターはやって来た。みんな抱き着いて再会と成功を祝福してくれた。心配したシアチェン氷河のアフターヌーンフラッドも梯子をかけて渡れる程度の幅で、あとはのんびりとポーター達の後について帰りのキャラバンを楽しんだ。もちろん隊員は僅かの荷物を担ぐだけである。



当時新聞に掲載された頂上での写真

31. 帰国・遠征隊解散

帰路キャラバンは25日間で、8月26日スカルドの飛行場に到着した。飛行場にテントを張って便を待つこと11日、9月6日にラワルピンディに帰り、懐かしのミセス・デービスホテルに投宿した。

役所への報告・手続きを済ませた後は、隊員の行動は自由にして日数の余裕と懐具合に合わせた小旅行をする事にした。私はK.Y君と二人で9月14日に帰国した。帰途は北京で一泊する予定であったが、毛沢東の死去と重なり、北京市中の混乱と飛行便が無くなるというハプニングがあって果たせず、南周りで成田に帰った。

出国時には生後70日だった次男は5ヶ月になり、私が抱くと人見知りして泣き顔で迎えてくれた。妻や両親共々私たちが無事で帰国した事でほっとした事であろうが、私としては「成功」した事も同じように喜んでもらったかった。

お世話になった方々へのお礼と挨拶、大阪大学山岳会の東京・大阪での報告会等を終えて、先輩のお骨折りで就職先を都合して頂き、翌年早々に会社勤めを始めた。登山報告書を作成する作業を分担して進めてはいたが、隊員達もそれぞれの生活に復帰した後は時間が割けず、予定どおりに原稿が進まない者も、集会に欠席する者も出てきてついに完成させる事が出来なかった。以来23年間、登山とは無縁の会社人間として生活してきた事は「はじめに」で述べた通りである。



32. マネジメントの反省

「遠征隊のマネジメント」と題して長々と書いてきたが、あとになって考えてみるとマネジメントと言えるような大したものではなかったと思う。どの隊を見ても、登頂に成功出来た最大の原因は、やはり天候に恵まれた「幸運」の一語に尽きる。隊長のマネジメントのどこが良かったかを考えてみても、これと言った物はない。成功のお喜びは“Congratulation!”に決まっている。

隊員は、山が好きで好きでたまらない者ばかりで、しかも「何がなんでも初登頂してやるぞ」と意気込んでいる者ばかりである。共通の目的は、「登頂」という明瞭・簡潔な物であるからマネジメントは無難にこなせたと思う。黙っていても各人の果たすべき役割をきちんとわかまえていて、実行してくれる。全員が高度順応出来た事も、「お蔭様」である。隊員自身が高度順応をする為に、高所に登ってはまた下りてきたり、わざわざ重目の荷物を担いで順化を早めてくれた。

隊長の責任は只一つ、遭難をさせない事である。雪崩に襲われそうなルート避ける事。滑ったり、転んだりの事故は登山では付き物で、そうなるも墜落しないようにロープを使う。それでも墜落を止められないような危険性があるルート、あるいは雪崩に襲われるルートは避けなければならないが、そのようなルートがなければ登頂をあきらめる他はない。その判断が隊長の仕事である。

危険を伴う登山というスポーツでは、リーダーは常に一番劣っている隊員に合わせて隊全体をリードする。岸壁の危険なルートであるか否かは、一番岩登りが下手な者を基準にして考える。パーティのスピードは一番体力の弱い人(調子の悪い人)に合わせる。それでは登頂できないと言う不満はめったに出でこない。なぜなら、「今ここにいる人間は全て必要な人間で、誰を欠いてもやっていけない」と思っているからである。そう信じさせる事が登山のマネジメントかもしれない。



33. あとがき

その後の大阪大学山岳会からは数人の隊員の規模で、二度カラコルムの6000m級の未登峰に遠征隊を出したが、山岳部の人気は3K(きつい・きたない・きけん)で落ちて、部員が数人と言うところまでになった。他方、新聞・雑誌でも見るようにヒマラヤに出かける人は結構いる。山好きはまだまだ健在だと思って拍手を送っている。

四半世紀前に山登りをしていた私にとって、はなはだ疑問に思う事が二つある。

その一つは、登山の目的である。即ち、地球上の殆どの山に登られてしまった後、8000mの高峰を酸素無しで登ったとか、五大大陸の最高峰踏破、8000m峰13山の踏破・等が個人の記録として話題になっていてそれを目標にしている人がいる事である。

逆のもう一つには、実力以上の山に連れて行く営業公募隊が生まれたことである。数万ドル程の金を積めばネパールの首都カトマンズからエベレストまでおんぶに抱っこで連れていってくれると言うガイド登山隊がある。1996年5月にエベレスト登頂を果たした後、下降時に不幸にも遭難死された難波康子氏が参加したガイド登山隊も、同様な公募隊であった。

善し悪しは別にして、私達が楽しんだスポーツ登山とは全く別の世界になってしまった事が残念でならない。

(終わり)